



MMA Weekly Report

★★ 日経平均株価 ★★

By Raymond A Merriman

投資日報出版 (株)

コピー 対外 配布 厳禁

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3丁目12番11号 GRANDE 人形町6階

No. 1172 Mar. 02 2020

TEL 03-3669-0278

FAX 03-3668-4444

1. 回顧

先週の相場は前週比2,243ポイント安の21,142。週の高値は2月25日(火曜日)の22,950、週の安値は2月28日(金曜日)の20,916。週の引け値は週間下値支持線を下回っていたので弱気。この引け値は週間トレンドインディケーターポイント(TIP)を2週連続で下回っていた。通常の場合、ここで基調は“ニュートラル”とするのだが、先週1週間で相場は昨年8月末の水準まで崩落。従って“下降トレンド寸前”へと格下げされている。

2. サイクルズ

拙著『フォーキャスト2020』の中でも解説しているが、日経平均株価は17年周期の長期相場サイクルが存在。その起点は2008年10月28日の6,994。本年は起点から12年目となる。

17年サイクルは8.33年サイクルで2分割され、2016年6月24日の14,864と同年2月12日の14,865との“ダブルボトム”で前半が終了。ここから後半(第2-8.33年サイクル)が始まっている。

更に、前者から34カ月目、後者から30カ月目に出現した安値が2018年12月26日の18,948。全てのサイクルは、内包するサブサイクルで2分割、ないし3分割されるのだが、8.33年サイクルが3分割されているのなら、この18年12月の安値は第1-33カ月サイクルボトムであったという見方になる。もしそうであれば、今月は第2-33カ月サイクルの15カ月目という事になる。更に週足サイクルに関して、当レポート(及び2月のMMAサイクルズレポート)では現行PC(通常の日柄は12~20週)の起点が目下2つの内のどちらかであるという見方を提示していた。

1つ目は昨年8月の安値(8月6日、15日、26日)をトリプルボトムとして、その中の8月26日の20,173を起点としたPCが、通常の日柄(起点から19週目)にあたる1月8日の22,951でボトムをつけ、ここから新PC入りしているという見方。2つ目は上記のトリプルボトムを起点としたPCが1月8日にボトムをつけずに延長し、起点から23週目にあたる2月3日の22,775でボトムをつけ、ここから新PC入りしているという見方である。

当レポートでは前回まで、後者の見方が有効であると見ていた。しかし、先週の大暴落を受けてこの見方が崩れる。現在は前者の見方が有効であると思われる。つまり、今週は1月8日の22,951を起点とするPCの8週目である。

通常、PCのサブサイクルはその大半が3つのMC(4~6週)で構成される3位相パターンか、2つのハーフPC(通常7~11週)で構成される2位相パターンのどちらかになる。現行PCの起点が1月8日とした場合、2月3日の安値は起点から4週目に出現した第1MCボトムであったという見方が出来る。更に先週の安値はPCの7週目にして第2MCの3週目に出現した安値であった。仮にこのPCがMCだけでなくハーフPCも混在するコンビネーションパターンであった場合、日柄的に今週は第1ハーフPC及び第2MCのボトム形成場面になる。日柄余地はあと2週。第1ハーフPCの日柄余地はあと3週ある(第2MCの日柄余地を鑑みると今週の可能性も)。ただ下げ幅の規模を考えると、現行PCはハーフPC2つで構成された2位相パターンなのかも知れない。

仮に(先週の安値を含めて)目先の相場が第1ハーフPCボトムをつけると、そこから第2ハーフPCの天井に向けた1~3週の反騰局面が出現する。

しかし、相場は既にPCの起点を割り込んでいる事から、現行PCの基調が弱気に転換した事が確定している。弱気PCにおける最安値はこのPCが終わる時、つまりPCボトム形成場面まで出現しない。その間、相場は高安値共に切り下がり線形になる。また、1月17日の高値(24,115)が現行PCの天井であった事も確定した。弱気PC内の第2ハーフPCの天井は、第1ハーフPCの天井でもある1月高値を超える事は出来ない。更に天井形成後はPCボトムに向けた2~5週間の新たな下降局面が待っている。理論上は、そこで今の安値よりもなお低い位置でボトムが出現するのが通常である。

今回の暴落により、現行PCの起点は1月である事がハッキリした。しかしこれにより、ここまで提示してきた長期相場サイクルの見方に揺らぎが生じる。当レポートでは以前から“…不規則且つ奇妙な値動きを伴う相場変動は、しばしば何らかの長期相場サイクルがボトムをつける際に見られる現象として知られている”と述べていた。冒頭でも述べたように今月は第2-33カ月サイクルの15カ月目。以前から我々は、このサイクルに内包している16カ月サイクルが2020年5月±3カ月の何処かでボトムをつけると指摘していた。

以前からの記述も含め、先週のレポートではこう述べている“…33カ月サイクルは、2つの16カ月サイクルで構成されていると見ている。…しかし当レポートでは以前、長期相場サイクル基調の強弱が判然としなかった際、8.33年サイクルが4年サイクルで2分割されている可能性も提示していた。その際、このサイクルは3つの16カ月サイクルで構成される事になる。この見方だと、18年12月の安値はあくまで2つ目の16カ月サイクルに過ぎず、そこから3つ目の16カ月サイクルボトムが出現し、その際に18年12月安値を下回る事になる。今月は18年12月安値から14カ月目なので、依然としてこの見方を完全否定する事が出来ない。…以上の事から、現在は日柄的に見て(1月なのか2月なのかという)正しい現行PCの起点、(第1なのか第3なのかという)正しい16カ月サイクルの存在、そして現行8.33年サイクルのサブサイクルが33カ月サイクルか4年サイクルかという正しい把握を明確化する上で重要な分岐点に位置していると言って良いだろう。…従って、現行16カ月サイクルに向けた下降局面が極めて厳しいものであった場合、これは(33カ月サイクルに内包する)第1-16カ月サイクルではなく、(4年サイクルに内包する)第3-16カ月サイクルである可能性は否定出来ない。なお、これについては今月(2月)の「MMAサイクルズレポート」の中も詳しく述べた”。そして今回の暴落によって、現行相場が目下4年サイクルに内包する第3-16カ月サイクルの中で進行している、という可能性が再び有力になって来た。

3. ジオコスミックス (天体位相の分析)

現行PCの起点が2月ではなく1月であった事が判明した現在、日柄的には目下第1ハーフPCのがボトムをつける時間帯に入っている。そして現在、2月27日の★★★重要変化日のオーブ(許容範囲)内に我々はいる。通常は±3営業日だが、以前から指摘の通り今回の★★★重要変化日のオーブは±1週間になる。同時にこの変化日の中心的時間帯は日柄的に水星逆行中間点の時間帯(日本時間2月26日)とも重なっている。

これは金融市場全般に言える事だが、水星逆行開始日付近で節目となる天底が出現しなかった相場は、しばしば水星逆行中間点±2営業日の時間帯で何らかの節目となる天底が出現する事が少なくない。今回の水星逆行は2月16日(日本時間であれば17日)に始まった。現行相場がこの付近で何らかの天井というべき節目となる高値をつけていなかった場合、中間点±2営業日の時間帯で何らかのボトムというべき節目となる安値が出現する公算が高い。相場を振り返ると、この相場は1月17日の高値を現行PCの天井として2月6日に2番天井をつけている。だが、ジオコスミック的にこの高値が水星逆行開始日と関連があるというには出現が早すぎるのでいささか無理がある。従って、過去の研究が示唆するものは水星逆行中間点±2営業日でのボトム形成場面であり、2月28日の安値は第1ハーフPCボトム形成場面としての要件をクリアしている。

しかし、現行相場が3月4日(水曜日)以降も下げ続けるようなら、満月の日である3月9日(日本時間10日)付近の時間帯までに第1ハーフPCボトムは出現するのではないか。このあたりでは太陽と海王星がコンジャンクション(0度)の関係になり(日本時間8日)、水星も逆行から順行に戻る(日本時間10日)。

更に、長期ジオコスミック要因に基づく我々の長期相場サイクル見通しについては、以前からこう述べている“（2019年11月の）「MMAサイクルズレポート」の中でも報告したように、1900年以降のデータを検証した結果、木星が射手座の10度から山羊座の20度まで運行している場面の何処かで長期相場サイクルは確固たる高値を形成していることが明らかになった。これを現在の天体運行に当てはめると、2018年12月21日から2020年10月31日までとなる。…木星は2019年12月2日に射手座から山羊座に移ったが、これまでこの期間中に出現した長期相場サイクルの天井の半分が木星射手座入居中に確認されていた。そして、残りの半分は木星が山羊座の20度に最初に通過した時間帯まで出現している。2020年中、木星の運行は山羊座の20度を3度通過する。本年最後の通過は10月31日、最初の通過は3月9日である。つまり上記の記述から鑑みて、現行相場は3月9日までに何らかの節目となる高値が出現する可能性が出て来ている。しかし、それは1月17日の24,115であったかも知れない。何故なら、この高値が出現する直前、1月12～13日にかけて土星と冥王星がコンジャンクション（0度）の関係にあったからだ。ただし、これ以外に長期相場サイクルの基調が反転する確率が高そうな別の時間帯として、今年の金星逆行期間（5月13日～6月25日）を挙げる事が出来るだろう。実際、日経平均株価が長期相場サイクルの天井をつけた場合、（2021年2～12月月に3回シリーズで出現する）土星・冥王星スクエア（90度）を要因とする、2021～2023年に出現するであろう長期相場サイクルボトムに向け、この相場は何処かで大きな下げがあるのではないかと、という見通しを、我々は未だに崩していない”。そして現在、ジオコスミック要因では日経平均株価における重要な天井が出現した可能性を示唆している。しかしそれは同時に、この相場が今後12週間以内に重要な安値を形成する可能性をも示している。

ただ先述の通り、現行相場は2021～2023年に長期相場サイクルのボトムをつける可能性がある事から、この“重要な安値”から反転した相場が、必ずしも反騰攻勢をかけて年間高値を更新するとは限らない。それでもなお、トレーダーには格好の仕掛け場所は幾数多存在すると思われる。その一方で投資家は、本年中に出現するであろう大きな反騰局面での売り、ないしヘッジ戦略を考慮しておく必要があるようだ。

4. 目標値及びパターン

当レポートでは以前からこう述べていた“私自身は2018年12月26日の安値（18,948）が長期16カ月、及び33カ月サイクルの起点であったという見方を現在に至るまで貫き通している。実際にそうであった場合、相場は今後1991年11月以来の高値水準であった2018年10月2日の高値24,448を試すか、場合によっては上回る可能性すらあるだろう。…相場は1月17日に24,116を記録。昨年12月17日の高値24,091を上回っていた。実際、値位置的には18年10月高値を試しにかかっている事には変わりはないが、現時点で上回る事は出来なかった。その一方で、米国株式は同じく1月17日に史上最高値を更新。これにより日米株価指数間での「異市場間弱気ダイバージェンス」発生のフラグが立った格好となっている”。日米株式共に先週大きく下げた現在、この異市場間弱気ダイバージェンスによる下落シグナルが具現化した格好となった。

また、先週の下落によって1月17日高値（24,116）が現行PCだけでなく現行16カ月サイクルの天井であった事が確認された。これに関して、当レポートでは先週もこう述べていた“…（現行16カ月サイクルの）天井であった場合、21,532±610に修正安目標値が設定される事になるだろう。なお、現時点で確認されているPCボトムは昨年8月に20,110～20,173の間で出現したトリプルボトムであった。この値位置もまた、現行16カ月サイクルボトムのサポート水準として有効と言える”。冒頭でも述べた通り、先週の安値は28日に記録した20,916。これは、ここで提示した2つのサポート水準の間に位置している。また、先週の記述はこう続く“しかし、今後の相場がこのサポート水準を割り込んだ時点で、現行8.33年サイクルが4年サイクルで2分割されている可能性が再度復活するだろう。それは即ち、現行相場が先述の18年12月安値を再度試しにかかる可能性が出て来る事を意味する。なお、上記18年12月に33カ月サイクルボトムが出現して以降、最も急激な下降局面は高値から10%に及ぶものであった。現行16カ月サイクルがボトムをつける際、1月17日の高値から少なくとも10%程度の下げがあるのではないかと我々は睨んでいる。実際にこの読み通りであれば、目先の相場は少なくとも21,705付近までは下がる、という計算になる”。

そして、現行相場はまだこの水準にまでは到達していない。

現時点で我々には、この相場が何処で下げ止まるのかという点について不明な所が多い。ただし、前PCの起点であった昨年8月のトリプルボトムの最安値であった20,110以上の値位置（あるいはその付近）まで下げても驚くには値しない。同様に、今週の週間下値支持線（後述）付近まで下落する可能性についても意識しておきたい。

一方、先週2月28日の安値が維持されて（第1ハーフPCのボトムが形成されて）いた場合、相場は日柄的には今後1～3週間、値幅的には22,000～23,000に向けた戻り場面が出現する公算が高い。その際、相場は13日移動平均、ひょっとすると39日移動平均をも上回る可能性さえあるだろう。

日足移動平均は先週、13日移動平均（23,090）が39日移動平均（23,434）を下回っており、実勢相場は引け値で両平均を下回っていた。従ってこれは、日足で見た相場基調が依然として“弱気”であるという事を意味している。ここから相場が両平均を上回ると基調は再度“ニュートラル”に格上げされ、更に13日平均が39日平均を上回ると、基調は“強気”に格上げされよう。

一方、週足移動平均は先週も24週移動平均（23,086）が39週移動平均（22,357）を上回っていた。しかし、実勢相場も引け値ベースで両平均を下回っている。従ってこれは、長期トレンド基調が“強気”から“ニュートラル”へと転換した事を意味している。ここから相場が両平均を上回ると、基調は再度“強気”に戻るが、現在の状態の中で24週平均が39週平均を下回ると、基調は“弱気”へと格下げされよう。

15日スローストキャスティックスは先週末の時点で%K=8.86が%D=15.19を下回っている。先週のレポートでは次の通り述べていた“この指標は先週の安値出現時に42～58%のニュートラルエリアまで低下していたものの、そこからカールアップを始め反転している。これは強気方にとって、先週の安値が単なるトレーディングサイクルボトムに過ぎず、2月3日の安値が現行PCの起点であり、依然として「サイクルの序盤は強気」の原則が生きている、という希望の光となった。しかし今週、この指標が下降転換して%Kが%Dを下回ると、相場基調はすぐさま弱気に戻り、大幅下落する可能性が出て来る”。指標はここで指摘したように下降転換。相場も大幅下落した。ただし現在、この指標は売られ過ぎの領域に到達している。それはひょっとすると、強力な反動反騰の起点となるのかも知れない。

一方、15週スローストキャスティックスは先週末の時点で%K=30.90が%D=53.30を下回っている。指標はなおも下降を指向中。それは即ち、目先の相場が先週の安値をも下回って行く可能性を示唆している。

5. テクニカル下値支持線および上値抵抗線

週間下値支持線は20,837～20,863、**20,126～20,389**、19,560、及び18,026に存在している。週の引け値が**20,126**を下回れば弱気、週の途中で下回っても、週の引け値で**20,389**を上回れば強気トリガー。

週間上値抵抗線は21,449～21,475、**22,160～22,423**及び22,767に存在している。週の引け値が**22,424**を上回れば強気。ただ週の途中で上回っても、週の引け値で**22,160**を下回れば弱気トリガー。

週間トレンドインディケーターポイントは現在**22,948**。今週、引け値でこの値位置を上回ると基調は“ニュートラル”に格上げされ、下回っていれば完全な“下降トレンド”へと格下げされよう。

強気クロスオーバーゾーンは依然として19,751～20,073、19,469～19,661、18,771～18,972、15,546～15,882、14,919～15,779、14,813～14,919…に存在。これらはサポートゾーンとして機能している。なお、先週の引け値で23,002～23,142、21,977～22,192、21,320～21,570にあったゾーンは破られている。これらは現在、レジスタンスゾーンとして機能している。

今回、**22,160～23,078**に新たな弱気クロスオーバーゾーンが形成された。この値位置は目先あらゆる反騰局面における強力な上値抵抗として機能する事になるだろう。なお、既に破られている16,740～16,816、16,069～16,347、14,813～15,204にあったゾーンは現在、有力なサポートゾーンとして機能している。

6. 今週のストラテジー

ポジショントレーダは現在ショート。今週は 23,400 以上の引け値にストップロスを入れて、この売りポジションを保持しておきたい。ただし、月曜日（3月2日）の時点でポジションの3分の1を利食いしておく事。

一方、積極的トレーダも現在ショート。先週は“ストップロス水準を 24,116 以上の引け値に入れて売りポジションを保持。その上で、23,275±50 まで下げた所ではポジションの3分の1を利食いしておきたい”とアドバイスしていたので利食いが出来ている。今週は月曜日（3月2日）の時点で更に3分の1のポジションを利食いし（理想としては 20,500 以下の値位置で利食いたいところだが、寄付きから1時間以内にこの水準に到達しなければ、過度に待ち構える事なく利食いを優先したい）、残り3分の1の売りポジションは 23,150 以上の引け値にストップロスを入れて保持しておく。更に、今回のレポートで新たに設定された弱気クロスオーバーゾーン（22,160～23,078）付近 — あるいは 22,200±250 付近の値位置 — 戻していれば、再度売り直しを図る事が出来るのではないか。

